

「二本のオリーブの木」と「二人の証人」に関する考察

6年ほど前に「64 啓示 1 1章の「二人の証人」とは誰ですか」という記事を書き、そこで、「二人の証人とは「ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンの2種類のグループである」と記しましたが、ここでは、さらにゼカリヤ書4章を含めて、改めて検証してみました。

ゼカリヤ書4章に、金の燭台と2本のオリーブについての描写がありますが、その前にまず、1章から、ゼカリヤについて少しだけ触れておきましょう。

「ダリヨスの第二年の第八の月に、イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤに、次のような主のことばがあった。主はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた。

あなたは、彼らに言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の主は仰せられる。あなたがたの先祖たちのようであってはならない。先の預言者たちが彼らに叫んで、「万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ」と言ったのに、彼らはわたしに聞き従わず、わたしに耳を傾けもしなかった。」 - ゼカリヤ 1:1-4

祖父：イド [Iddo 意味：timely タイムリー（時を得た、折よい、ちょうど間に合った）]
 父：ベレクヤ [Berekyah ベレクヤー（字義訳：ヤハの膝（ヒザ） ヤハウエは祝福する）]
 ゼカリヤ [Zkaryah ザカール ヤー（ヤハは覚えている、思い出す）]

この預言者の3代の名を連ねた意味は「時を得た時、ヤハは祝福を、思い出される」ということになります。

神はご自分の民、イスラエルに対する約束された祝福をもたらすことが到来する時の出来事を、ゼカリヤに幻によってお与えになります。

その期が熟した時に神は、その先祖たちの故に長年嘆かわしい状態にあったイスラエルに悔い改めを訴えられ、回復の道を整えられるということです。

ではまずここに、黙示録 1 1章の「二人の証人」とリンクしていると思われるゼカリヤ4章の冒頭部分を引用しておくことにしましょう。

「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。

また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」・私はまた、彼に尋ねて言った。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」

私は再び尋ねて言った。「二本の金の管によって油をそそぎ出すこのオリーブの二本の枝は何

ですか。」…彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」
-ゼカリヤ 4:2-3,12-14

ここで使用されている「オリーブ」という語のヘブライ語は「Ha Zeitim;ハゼイティーム(名詞、複数形)(ちなみに単数形は[ザイン])」ですが、他に IIサムエル 15:30 I歴代 27:28 ゼカリヤ 14:4などに現れます。

ゼカリヤ4:3	
zê-tîm	ū-šə-na-yim
הַיְתִים	וּשְׁנַיִם 3
olive trees	and two

ところでその「オリーブの木」と訳されている部分ですが、「ゼイティーム」は単に「オリーブ」という名詞であり、「木」という特定の語は存在しません。

この「ゼイティーム」が出て来る他の聖句を幾つか比較して、その訳語に注目してみましょう。

ゼカリヤ 14章に出てくる「ゼイティーム」は「Har HaZeitim (ハル ハゼイティーム)」というふうに「ハル(山)」という語を伴っていますので「オリーブ山」と訳されています。

ゼカリヤ 14:4		
haz-zê-tîm	har	'al-
הַיְתִים	הַר	עַל-
of Olives	the mount	on
オリーブ	山	

「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。」ゼカリヤ 14:4

IIサムエル15:30		
haz-zê-tîm	bə-ma-'ā-lêh	'ō-leh
הַיְתִים	בְּמַעֲלֵה	עָלָה
[mount] of Olivet	by the ascent	went up
オリーブ(山)	昇る	

しかし IIサムエル 15:30 では、「ハル」という語はないのに「ゼイティーム」を「オリーブ山」と訳しています。それは、「坂を昇る」という語を伴っているので、「オリーブの坂を昇る」では分かりにくいので「山」という訳語を挿入しているのでしょう。

I歴代27:28	
haz-zê-tîm	wə-'al-
הַיְתִים	וְעַל-
the olive trees	And over

ゼカリヤ4:11		
hā-'ē-leh,	haz-zê-tîm	šə-né
הָאֵלֶּה	הַיְתִים	שְׁנֵי
these	olive trees	two

そして、I歴代 27:28 とゼカリヤ 4:11には「木」という語は存在しないのに「ゼイティーム」を「オリーブの木」と訳しています。

つまり、これらのことからわかるようにヘブライ語「ゼイティーム」は単に「オリーブ」という意味であり、文脈によって「木や山」などが付加されることもあるということです。

さて、ゼカリヤ 4章の 11,12 を読まれて「??」と思いませんか？

11節で「2本のオリーブの木は何?」と訪ね、再度の質問は「2本のオリーブの枝は何?」となっています。

「木」と「枝」では微妙に異なります。

ゼカリヤ4:12

haz·zê·tîm, šib·bā·lé šə·tê

הַזֵּיתִים שִׁבְלֵי שְׁתֵּי

olive branches [be these] two

オリーブ 枝 2つ

ゼカリヤ4：12では、「シバーレ（枝）」という語を伴っていますので、「オリーブの枝」と訳されています。それで、ゼカリヤ4章3節や11節の「2本のオリーブの木」が12節でいきなり「オリーブの2本の枝」になっているのは間違いではなく詳述と捉えるのが正しいでしょう。

実際、3節と11節の方は字義的には「2つのオリーブ」という記述です。

「木が2本」存在するとは原語のどこにも書かれていません。

ですから、正確にイメージすると、原語では何も触れていない「木」そのものは、おそらく1本で、ゼカリヤは2本の異なる枝から金のパイプによって燭台の鉢に油が注がれていたのを見て、そのようなやり取りがあり、このように記録しているのでしょう。

それで、ゼカリヤが描写しているこの4章の燭台のシーンを文字で表すと、全体の構図としてはまず、1本のオリーブの木の2本の枝から、金の管で繋がった油を受けるための鉢があり、その鉢から7本の管を通じて、7つの「ともしび皿」に油が自動的に供給されるというイメージです。

それは決して「油断」することのない、不屈の光源が確保されているということなのでしょう。

このことを踏まえてローマ11章と重ね合わせますと見えて来るのはこういうことです。

アブラハムを根とする1本のオリーブの木、つまりアブラハム契約ですが、その「栽培されたオリーブの木」の

本来の枝、つまり（メシアを認めた）イスラエル人（再接ぎ木されたユダヤ人を含む）という枝と「野生種であるオリーブの木から切り取られ」接ぎ木された異邦人からのクリスチャンというもう一つの枝、という2本（2種類）の枝を通して、神からの「油」が随時補給されるということを表し、そしてさらにここに、黙示11章を重ね合わせると、終末期、患難の真っ最中に、「二人の証人」を通して神の聖霊は途絶えることなく、歴史上例がないほどに、その預言者たちに注がれるということを示しているのであろうと考えられます。

さて、ゼカリヤの「二人の油注がれた者」と黙示録の「二人の証人」を比較し、共通点を挙げてみますと・・・

「ひとりの方がいて、その手に一本の測り綱があった。…彼は答えた。「エルサレムを測りに行く。その幅と長さがどれほどあるかを見るために。」ゼカリヤ2：1,2

「私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。」黙示11：1



2つの書の微妙な違いは、ゼカリヤでは計測されるのはエルサレムという都市ですが、一方黙示録では神殿とその礼拝者を測ります。

「私はまた、彼に尋ねて言った。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」ゼカリヤ 4：11,14

「彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。」黙示 11：4
黙示録の方では、彼らは、オリーブの木でもあり、燭台そのものでもあるということになっています。

黙示11:4

dyo elaiiai
δύο ἐλαΐαι
two olive trees

ところで、先程ヘブライ語の「オリーブ（ゼイティーム）」について記しましたが、ここでも「オリーブの木」と訳されていますが、原語では「ディオ エライアイ（2つのオリーブ）」となっており「木」を意味する単語は存在しません。

[ἐλαΐαι](オリーブ)に関する参照聖句

黙示11:4

hai dyo elaiiai kai hai dyo lychniai
αἱ δύο ἐλαΐαι , καὶ αἱ δύο λυχνίαι
the two olive trees and the two lampstands
2つの オリーブ 2つの 燭台

ヤコブ3:12

sykē elaias
συκῆ ἐλαίας
a fig tree olives
木の实 オリーブ

マタイ21:1

oros tōn Elaiōn
ὄρος τῶν Ἐλαιῶν
mount - of Olives
オリーブ オリーブ

ルカ19:29

oros to kaloumenon Elaiōn
ὄρος τὸ καλούμενον Ἐλαιῶν
mount - called Olivet
山 呼ばれる オリーブ

ですから2本の「木」ではなく、「2本（2種類）のオリーブの枝」と捉えても良いということです。

ゼカリヤ4:12の内容を踏襲すると、黙示11:4は「彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの枝、また二つの燭台である。」ということです。

それで、これらの、ゼカリヤの「オリーブの2本の枝」で示される「ふたりの油注がれた者」と黙示録の「オリーブでもあり燭台でもある「二人の証人」は当然、同一のものを表しており、「オリーブ（油）と燭台」の象徴は、彼らの強力な預言活動の凄まじさの源が、あたかも無限の油を内在した燭台として、闇を暴き出す、また真理を明快にする強烈な光を放つことを可能にさせる、万軍の主（ヤハウエ）からの「権力によらず、能力によらず、わたしの霊による」（ゼカリヤ4:6）と言われる、聖霊の働きであることが分かります。

この油と燭台に関する記述は、マタイ 25 章の、真夜中に花婿の到着に備えて、迎えに出る賢い娘たちを彷彿させます。

「賢い娘たちは、自分のともしびと一っしょに、入れ物に油を入れて持っていた。」 - マタイ 25:4

この 10 人の娘たちは、終末期に地上にいるクリスチャン（自称を含む）たちで、自らに油を持っていた賢い娘たちは、キリスト再臨時である真夜中（大患難の直後で、人類は暗澹たる状況にある）に灯火を明るく灯す人々です。

また更に、この娘たちの「賢さ」は、ダニエル 12 章の「大空の輝きのように輝く思慮深い人々」にオーバーラップします。

「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民（イスラエル人）で、あの書にしろされている者はすべて救われる。

地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。

思慮深い人々は、大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」 ダニエル 12:1-3

この記述は、冒頭に記したゼカリヤの幻に関して「神はご自分の民、イスラエルに対する約束された祝福を執行されることが到来する時の出来事を、お与えになる」という、出来事に匹敵するものです。

同様にこれは、ローマ 11 章で描かれている、イスラエルの再接ぎ木がなされる時でもあります。

それはすなわち、ミカエルが立ち上がり、苦難の時が生じる時に起きますが、「この時（タイミング）」で「書に記されている全イスラエル」が救われるということです。

「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます」という記述のために、多くの解説者はこの時、復活が起きるとしています。

しかし、ダニエルのこの記述は大変不可思議な内容です。

「地のちりの中に眠っている者」全員が復活するのではなく、「眠っている者（死者？）」「のうち」「多くの者」が対象者です。

しかも、「多くの」とは言え何らかの理由で選抜された人々なのに、ある人は「永遠の命に」、別の人は「そしりと永遠の忌みに」と正反対の結果に至ります。

一体、その違いは何に基づく、何のための、復活なのでしょう。

このことによって神のどんな目的が果たされるのでしょうか。

どう考えても「地の塵の中の眠りから目覚める」というのは文字通りの死者の復活があるということであるとは考えられません。

これが象徴的な表現に違いないという理由は、まず、聖書中の他の記述の中に、このタイミングで、2種類の人が、地上に復活してくるという記述は存在しないからです。

この「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。」とは、ゼカリヤ1章で、「わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る」という万軍の主の言葉を、語り告げる「思慮深い人々」「二人の油注がれた者の一人であるもの」が、同国人に対して「あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ」と言ったのに、彼らはわたしに聞き従わず、わたしに耳を傾けもしなかった。」(ゼカリヤ 4:1) と糾弾されている、彼らの先祖たちに連なる深い眠りから目覚めさせられる、つまりイスラエルに対す再接木キャンペーンに伴って、「彼らの罪を取り去る」という活動の結果生じるものです。

また、「二人の証人」のもう一方の一人、異邦人からなるクリスチャンたちの活躍も、オリーブの枝と直結しているゆえにその豊かな聖霊を受けて、超強力な証の業を行うことになりませんが、それは大患難期である後半の3時半の業なので、「彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」(黙示 11:3) ことになっています。

「人々は、あなたがたを議会に引き渡し、また、あなたがたは会堂でむち打たれ、また、わたしのゆえに、総督や王たちの前に立たされます。それは彼らに対してあかしをするためです。こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。

彼らに捕らえられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。」 - マルコ 13:9-11

ですから、この「二人の証人」つまり二組あるいは二種類の油注がれた証人である「ユダ人クリスチャン」と異邦人クリスチャン」が「主の日」すなわち「神の怒り」が地に対して表明される患難の日に、同時進行として、王国の福音が全地に対して証しされるときであり、そのために神の聖霊は尋常では無いほど注がれることになります。

「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」 - マタイ 24:14

「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。

あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。

その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。」 - ヨエル 2:28,29